

『私の父』

松吉 紗弥

私の父は「怖い」。この怖いというのは厳しく叱ってくるだとか、いつも怒鳴っているだとか、そういうことではない。単に顔が怖いのだ。怖い顔というのを想像しながら聞いてほしい。例えばあなたの思う怖い顔の人が店の前で立っていたとする。その時あなたは店に入るのに少なからず抵抗があるはずだ。それが私の父ならば誰もがそう思う、そう確信できるほど私の父は怖い。少しは父の顔を想像していただけだろうか。

私はそんな父の行動を観察することが今一番、楽しみにしている事だ。なぜなら私の父の行動は「怖い」顔に見合わず、「可愛い」と思える事が多いからだ。幼稚園児や小学生がしていても可笑しくないような行動をよくとる。ある日私ที่บ้านに帰ると、父はじっと外を見ていた。最初は空か何かを見ているのだと思い、特に気にせずにはいたがあまりにも長く外を見ているので

「何をしているの。」

と聞いた。すると父は

「すずめが1人で寂しそうだったから、テレパシーで話してた。」と当然のように答えた。私にはそれが冗談には聞こえなく、本気で言っているように思えてならなかった。恐らく、私でなくてもこのような状況に何度も遭遇したら驚きと共に「可愛い」という感情が芽生えてくるだろう。人は見た目だけで判断出来ないとはつくづく思う。そしてそんな父と私は瓜二つだ。